

的生き方の問題性に気づき、真の宗教性を求めるべき時を迎えていると言えよう。

アメリカの宗教事情と日本人の宗教性

那須 英勝

日本社会は「非宗教的」で日本人は「無宗教」だと説くようになって久しいが、海外、特に米国の日本宗教研究者は、日本社会は中世以来「世俗的な宗教社会」であり、現代の日本人は自己に対しても他者に対しても、非常に寛容で多元的な宗教観を持っていると評価する人が多い。(Ian Reader and George Tanabe, *Practically Religious* [1998]; George Tanabe, ed., *Religions of Japan in Practice* [1999] 等)。日本宗教に対するこのような評価の違いが生じる背景には、まず、米国の日本宗教研究者は、特定の宗教的信仰に従って生活することだけでなく、世俗的な環境の中で宗教儀礼を行うことや宗教関連施設へ参拝することも、特定の宗教に対する信仰を持つことを表明することと同様に重要な宗教的行為であると考えられる点があるだろう。例えば日本を訪れる米国の宗教研究者から「イスラム教徒の年間のメッカの巡礼者数(二五〇万人)よりも、伏見稲荷の初詣者数(二七〇万人)のほうが多い」という数字を日本の宗教批評家は過小評価しているのではないか」という意見を聞かれるのは私だけではないだろう。しかし米国の宗教研究者たちが驚くのは、初詣などの宗教行事において、米国人の常識を遙かに超える数の人間(しかも、その大半が自分を「無宗教」だと考えている)が、非常に狭いエリアに建てられた宗教施設に

トラブルもなく整然と参拝できるのはどうしてなのかということである。

日本人の道徳性・宗教性について、米国のメディアは、東日本大震災直後に、米国社会では考えられない秩序ある行動をしたことについて、様々な報道がなされたことは記憶に新しいが、その中でも、宗教研究者の視点からは、震災発生一週間後(三月一七・一八日)に、米国の公共放送(NPR「ラジオ」とPBS「テレビ」)に、ダンカン・ウィリアムス氏(南カリフォルニア大)、ジョン・ネルソン氏(サンフランシスコ大)、ジェフリー・リッチー氏(ベレアカレッジ)の三氏に、震災と日本人の宗教観についてのコメントを求められたものがあり大変興味深い。三氏はいずれも、日本は概ね世俗的な社会であるが、非常の事態に直面した時には、その身についた宗教性が自然に現れてくるという。しかしそれは米国人が考えるような、特定の宗教的教義にもとづいて苦難の原因を宗教的に理解し、自己の強い信仰によつて乗り越えようとするものではない。被災地において、倒壊した建物に無言で合掌し頭を下げる人々の姿にこそ、日本人の深い宗教的内省心が表現されており、またそのような日本人の宗教性を、社会的に最もよく示すものは「家族」や「地域共同体」の構成員による「宗教儀礼」の中にあり、コミュニティの中で肅々と執り行われる「宗教儀礼」にこそ、日本人の宗教観が示されている。また、震災のような非常の事態に直面した時にでも、秩序ある行動を可能にした日本人の道徳性・宗教性の背景には、普段から様々な宗教行事に参加する際にすでに培われているのだらうと分析しているところである。

現代米国社会は表面的には物質主義的かつ世俗的であるように見えるが、建国以来の伝統として個人の信教の自由が幅広く認められている国であり、最近の宗教意識調査でも米国市民の七割以上が「特定の宗教に対する信仰がある」と答える(The Pew Forum, U.S. Religious Landscape Survey等)という世界でも最も宗教心の篤い市民によって成り立っているはずの社会である。しかし宗教的教義に対する強い信仰の表明が、その裏返しとして宗教的非寛容性を生み出し(Corrigan and Neal, *Religious Intolerance in America* [2010])、人種差別や性差別などの社会問題を生み出すことも指摘されている。米国の宗教研究者が、日本人の宗教性について関心を持つ原因には「個人的信仰」中心の宗教観に支配されている米国の宗教文化に内在する問題をどのように解決するかというところにもあるのだろう。

ヨーロッパの宗教事情と日本人の宗教性

寺本 知正

NCC宗教研究所では、二〇〇二年から毎年、*Inter-religious Study in Japan*というプログラムを実施している。ドイツを主としたヨーロッパの大学で、将来キリスト教聖職者、宗教教育者、研究者を目指す学生を一学期間に数名迎え入れ、日本の諸宗教に関する講義と交流を行うプログラムである。背景には、ヨーロッパの宗教環境が多宗教圏へと変化してきたという事情があり、学生が日本の多宗教環境を経験することを趣旨とするものである。ここでは、彼ら学生たちが日本人の宗教性を

どのように捉えたかを紹介し検討してみたい。

ヨーロッパ諸国と日本の宗教事情を隔てる大きなものの一つに政教関係がある。「日本では、教会は国家からどのような権利を認められているのでしょうか」(ゲッティンゲン大学所属、以下大学名のみ)という問いを持ち参加した学生がいる。日本とは異なり、デンマークは国教会をもち、スウェーデンとノルウェイは最近になって分離が実施された。ドイツに国教会は存在しないが、教会として認められた団体に関しては、教育、社会福祉事業、軍隊・病院・刑務所などにおける活動において国家との分離は「跛行的分離主義」(善家幸敏)という盟友関係にある。すなわち、教会の公共的な活動は国や州からの財政負担を得、公共放送へ理事を送るなどの権利も認められている。ヨーロッパでは、「宗教」は個人の信仰の問題としてだけでなく、常に公共の問題として問われる制度上の基盤がある。この点、日本の宗教の社会参画の意識は、注意深く検討される必要があるだろう。学生の多くは、大阪釜ヶ崎の「希望の家」の活動に共感し、同時に「節分。吉田神社は参拝者でいっぱい」「大きな寺や神社の境内に入った時に感じた、都市生活から深い自然に入っていく時のような驚きの感覚」(ライブティヒ)というように、祭りなどの行事や宗教施設、また、「地藏菩薩への信仰」(ミュンスター)などの教団化されていない宗教と、地域共同体との繋がりに注目する学生もいた。宗教は「特別なことです。だいたい毎日の生活にはあまり出てきません。仕事に行く途中には絶対に教会に入りません」(ベルリン)と教会事情を紹介する学生は、日本では「日常生活の中で儀式を守っ